

平成30年度劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)

成果報告書

団 体 名	公益財団法人 札幌市芸術文化財団	
施 設 名	札幌コンサートホール	
助成対象活動名	普及啓発事業	
内定額 (総額)	10,769	(千円)
公 演 事 業	0	(千円)
人材養成事業	0	(千円)
普及啓発事業	10,769	(千円)

(2) 平成30年度実施事業一覧

【普及啓発事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	Kitaraあ・ら・かると	2018年5月3日～5日	角田 鋼亮、成田 達輝、札幌交響楽団、市内中学校合唱部(計18校)、マルタン・グレゴリウス(札幌コンサートホール専属オルガニスト)、デュエットウ、村上 敏明、江崎 浩司、地元音楽大学推薦の学生・卒業生	目標値	10,000名
		札幌コンサートホール 大ホール・小ホール 他		実績値	公演等イベント参加者： 8,986名 エントランス総入場者： 10,781名
2	Kitaraのクリスマス	2018年12月22日	井上 道義、山根 一仁、山尾 洋史、山尾 恭子、札幌舞踊会、札幌交響楽団	目標値	1,300名
		札幌コンサートホール 大ホール		実績値	1,521名
3	Kitaraのニューイヤー	2019年1月12日	沼尻 竜典、砂川 涼子、笛田 博昭、札幌交響楽団	目標値	1,300名
		札幌コンサートホール 大ホール		実績値	1,086名
4	Kitara&札幌音楽家協議会連携プロジェクト 札幌の奏響(ひびき)Ⅱ	2019年3月21日	阿部 博光、大嶋 恵人、札幌音楽家協議会室内オーケストラ・合唱団	目標値	270名
		札幌コンサートホール 小ホール		実績値	402名
5	Kitaraファースト・コンサート	2018年10月30日、31日、11月1日、12月4日、5日	佐藤 俊太郎、垣内 悠希、札幌交響楽団、シモン・ボレノ(札幌コンサートホール専属オルガニスト)、鈴木 舞、古屋 瞳	目標値	16,000名
		札幌コンサートホール 大ホール		実績値	15,645名
6	Kitara室内オペラ「ヘンゼルとグレーテル」	2018年10月13日、14日	北海道二期会メンバー	目標値	700名(2公演計)
		札幌コンサートホール 小ホール		実績値	760名(2公演計) 1日目：376名 2日目：384名
7	専属オルガニストによる アウトリーチコンサート	2018年5月26日、7月19日、 8月7日、12月13日	吉村 怜子、平岡 智成、札幌コンサートホール専属オルガニスト (マルタン・グレゴリウス、シモン・ボレノ)	目標値	600名(計)
		市立澄川小学校、札幌彫刻美術館、札幌芸術の森美術館、札幌文化芸術交流センターSCARTS		実績値	517名(計) 5月26日：89名 7月19日：172名、 8月7日：92名 12月13日：164名
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	30,170
				実績値	30,712

【妥当性】

自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

普及啓発事業は、「次世代の演奏家の育成と新たな聴衆の開拓」のミッション達成に向け、きがるに音楽を楽しむコンサートの実施、地元演奏家の活用、子どもが音楽に親しむ機会の充実を目標に事業を行った。

普及事業全体は、（1）専属オルガニストによるオルガン事業（2）札幌オーケストラシリーズ（3）地元音楽家・音楽団体との連携事業（4）ゴールデンウィークに開催するホール開放事業「Kitara あ・ら・かると」の4つを柱に計画している。それぞれ年間の事業数・開催時期をさだめて、シリーズ化させている。この組み立て方が、事業運営の見通しと、演奏会への固定ファンの獲得を担保している。また、年ごとに出演者やプログラムの内容を変えながら事業を展開している点は、マンネリ化に陥らずバリエーションの豊かなプログラムと新たな聴衆の開拓をめざす工夫と言える。

助成金交付要望書から変更が生じた点として、「Kitaraのクリスマス」「Kitaraのニューイヤー」は、共演するソリストやプログラムの内容が提出後に決定。また、「専属オルガニストによるアウトリーチ」は、開催館とプログラムの詳細が要望書提出後に決まっている。独自の企画性と親しみやすさを実現するため、出演者や開催館と密に連携し、双方の要望を摺り合わせるため、時間を要することが理由に挙げられる。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

シリーズ化により、安定した事業成果を生み出す仕組みが出来ている。目標に適った事業を実現するため必要な時間をかけて運営しているが、企画の詳細について早期に決定できるよう努める。助成を得ることにより、出演歴のないアーティストを起用したり、専属オルガニストや地元演奏家・団体を活用することで、音楽事務所や地元演奏家団体が企画しないオリジナリティあるプログラムを実現している。

【有効性】

自己評価

目標を達成したか。

新規客層の開拓、地元演奏家の活用、子どもへの豊かな音楽経験の提供を目標として事業を行った。「Kitaraあ・ら・かると」では、安定して新規観客を獲得している上、事業の継続により、近年は特に子ども連れのリピーターが増加している。低料金で未就学が音楽に出会う機会を提供している点で継続を望む声も多く、来年度は司会やプログラムについても内容をさらに精査したい。

札幌オーケストラシリーズの「Kitaraのクリスマス」「Kitaraのニューイヤー」は、観客の高い満足度を維持している一方で、顧客の固定化が進んでいる。平成30年度同様、これまでにない指揮者やソリストを起用し、新しいプログラムや広報策を取り入れ、魅せ方を工夫することで、新規観客の獲得、特に青少年へアピールしていく必要がある。

「ヘンゼルとグレーテル」は回数を重ねるごとに新規客層が増加し、3年間の事業継続により「子どもが初めてオペラに触れる場」として非常に高い役割を果たした。「札幌の奏響Ⅱ」は高い入場者数を維持できているものの、プロジェクト2年目の現在は観客の固定化が指摘できる。最終年度も過去2年同様にプログラムに工夫を凝らすことで、新規客層・青少年の来場を促したい。また、今後は一流の演奏家との共演やセミナー等育成の機会を設けることで、地元団体の演奏レベルのさらなる強化につながる内容にしたい。

「Kitaraファースト・コンサート」は、15年の事業継続の成果が顕著であり、多くの子どもにとって初めて生の音楽に触れる豊かな経験となっている。オーケストラ伴奏による合唱は、参加型の体験に感動を覚える近年の児童の傾向に合致し、特に高い満足度を生み出している。「アウトリーチコンサート」は専属オルガニストや札幌コンサートホールを広く市民に紹介し、子どもたちが音楽に触れる場として活用できた。来年度はアンケートを実施し、観客の声を反映したより効果的な事業として継続したい。

【効率性】

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

今回採択された普及啓発事業は、新規客層とリピーターの双方を獲得するためにも、広報に力を入れて新たな魅力を伝えられるように工夫した。

「Kitaraあ・ら・かると」は、パンフレットのポスティングを公演1ヶ月前に行い、期間中の予定が決まっていなかった新規客層の獲得を目指した。来場者アンケートでは平成29年度・30年度ともに「はじめて来場」の回答者が約15%以上を記録し、開催時期に見合う成果が得られている。

「きがるにオーケストラ」では、若手の指揮者を起用することで前年度より出演料の支出を抑えた。また、ソリストを起用することで多様なプログラムを楽しめるように工夫した。

「オルガン・ファンタジー」では、無声映画とオルガンによる即興演奏のコラボレーションを初めて実施。映像作品の賃借や、新規客層獲得に向けてちらしを作成するなど当初の計画より支出が大きかったが、入場者数は前年度比で約200名増となった。

「Kitaraのクリスマス」では、2年ぶりの出演となる井上道義氏を指揮者に迎えた。指揮者とスタッフが東京で直接打ち合わせを行い、独自性ある企画とスムーズな運営準備につながった。また、初の試みとして映画館でのCMを実施。「チケットを購入して鑑賞する」層にアピールができるため、今後も公演によって実施したい。ソリストの起用により当初より出演費・委託費に経費がかかっているが、内容の充実と観客の満足度につながった。

地元音楽家による「ヘンゼルとグレーテル」（2公演）では出演者へのチケット斡旋販売を行わずとも完売となり、3年間継続したプロジェクトが定着したことが読み取れる。

「札幌の奏響Ⅱ」では地元音楽団体と公演の半年前から念入りに打ち合わせを実施。開催時期に合わせた「春らしさ」を感じさせるプログラムで完売につながった。

次年度以降についても、新規層獲得、リピーターの定着のために新たな広報戦略を引き続き検討し、効率的な収支計画を念頭に運営してゆく。

【創造性】

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

●優れた音響を備える音楽専用ホール

札幌コンサートホールは、国内外の音楽家が集い、札幌から音楽を創造、発信する空間であること、市民の教育・交流の場であることを目指している。北海道唯一のプロオーケストラ札幌交響楽団やパシフィック・ミュージック・フェスティバル（PMF）の拠点でもあり、地域の中核施設として、多彩な音楽にふれる機会を提供している。また、フランスの音楽院から推薦された演奏家を専属オルガニストとして起用し、市民の要望で設置されたパイプオルガンの魅力を発信し、その期待に応え続けている。

●平成30年度の事業について

当ホールの普及事業の要とも言える音楽祭「Kitaraあ・ら・かると」には総勢1万人以上が来場し盛況を収めた。無声映画とオルガン即興演奏のコラボレーションなど、新たな客層を取り込む工夫を行った。

「Kitaraのクリスマス」「Kitaraのニューイヤー」には札幌交響楽団が出演。

「Kitaraのクリスマス」では、アルゼンチン・タンゴのダンサーや地元の子どもダンサーがステージに登場するなど、指揮者井上道義のエンターテインメント性の高い企画で聴衆を魅了した。「Kitaraのニューイヤー」では「イタリア」をコンセプトとしたプログラムを、国内外のオペラ界で活躍する歌手と沼尻竜典のタクトで華麗に描き出した。両公演ともPMFと広報協力を行った。

市内の全小学6年生を招待する「Kitaraファースト・コンサート」には、初めて聾学校の児童が参加した。点字プログラムや手話通訳を用意したほか、音圧が感じられる席を割り当てるなど配慮した。

「オルガンアウトリーチコンサート」では、専属オルガニストが小学校や財団が運営する他施設でコンサートを実施。子どもたちが作った物語に即興で音楽をつけたり、展示作品から着想を得た作品を演奏するなど意欲的なプログラムを提案し、好評を得た。

【創造性】

自己評価

地域の実演芸術の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

●地元音楽家の育成

札幌出身の成田達輝や山根一仁らを札幌交響楽団のソリストとして招聘したほか、地元音楽大学の学生による合同コンサートを実施した。「ヘンゼルとグレーテル」では地元の若手歌手を主役に起用。また、札幌音楽家協議会メンバーによる「札幌の奏響Ⅱ」公演の実施など、今後の札幌の音楽シーンを担う音楽家を広く市民に紹介。地元演奏家の演奏機会の充実を図り、地域の音楽文化の発展に努めた。

●子どもが音楽に親しむ機会の充実

札幌の文化芸術を発展させ、すそ野をひろげるためには、次世代を担う子どもたちが生の舞台芸術に親しみ、感性を育む機会が重要である。「Kitaraファースト・コンサート」は、平成16年度の開始以来、これまで約19万人の子どもたちが札幌交響楽団、専属オルガニストの演奏を鑑賞してきた。加えて、アウトリーチ等に参加した子どもが興味をもち、保護者とともに来館する例もみられることから、子どもたちへの“種まき”は着実に実を結んでいるといえるだろう。また、未就学児入場可のコンサートの充実を図り、平成30年度は9公演を実施した。

●多くの市民にホールの音楽とともにある生活を

市民が「札幌市が優れている」と考える文化芸術分野はクラシック音楽が高い割合を占めているが、ホールの来場者数は減少傾向にある。普及啓発事業においては、一流音楽家による公演に加え、低額なチケットで気軽に音楽に親しむ機会の拡充にも力を入れ、観客の間口拡大に努めることでクラシック音楽初心者にも魅力的な企画となるよう工夫した。

また、ホームページ（平成30年度 年間閲覧数約637,000件）、ツイッター（フォロワー数 約3,600名）、メールマガジン（月2回）、公演スケジュール（年間300,000部発行、約570か所に配布）、さらに「Kitaraあ・ら・かると」のホームページを特設するなど、多様な媒体とアクセスや見やすさを重視して情報を提供。新規層へのアプローチにも取り組み、平成30年度は映画館でのCM放映及びラジオでのプロモーションを実施した。

【持続性】

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

●財団全体の経営について

財団の過去3年間（平成28年度・29年度・30年度）の収支予算書によると、各年度の経常収益は経常費用に対して大幅な差が生じないように計画されている。また、過去2年間の経費執行状況（決算）と比較すると、各年度予算書に沿った適切な経費の執行をしている。

予算書を対前年度で比較すると、予算額は例年増加傾向にある。過去3年間を通じて指定管理費は収益の約70%を負っているため、費用を軽減する方策として、スポンサーや助成金の獲得に向けた努力が必要となる。平成30年度は市民交流プラザ開設に伴い、10億円近い予算の増額が行われた。新施設のオープンは、札幌の芸術文化醸成の成果のひとつといえ、当財団のより発展的な活動が市民から期待される。

●人員配置・雇用について

財団全体の方針として、高い技術・技能と多岐の分野にわたる専門性を有する総合力を発揮する財団をめざしている。採用においては、公平中立な公募を基本とし、若年層を対象とした一般の採用枠だけでなく、文化施設での経験者を対象とした枠を設けることで、多様な人材の起用に努めている。

職員の育成においては、新たな芸術文化の課題に対応できる高い識見と意欲を持ち、人間性豊かな人材を育成することを方針としており、職員に見合ったさまざまなタイプの研修制度を設けているほか、職務内容と個人の能力・専門性・適性を考慮した職員配置を心掛けている。

●ホールのネットワーク

札幌コンサートホールが20年間で培ってきたネットワークは、市内スポンサーや教育機関にとどまらず、企画連絡会議連携施設やリスト音楽院など国内外に広がっている。札幌市の人口減少・少子高齢化という社会変化を前に、安定した成果を達するためには、このネットワークを活用する連携は不可欠といえる。また、ネットワークのより強固な結びつきとさらなる広がりに向けて、より発展的な事業展開が望まれる。